T-2　気仙沼市唐桑町早馬神社　2012 年 2 月 17 日（木）

報告者名　植田今日子　　被調査者生年　生年未確認（男）
調査者名　植田今日子　　被調査者属性　早馬神社宮司
補助調査者　相澤　卓郎

唐桑町沿岸 17 浜（浦あるいは港）で執り行われている海にまつわる祭祀であるウラマツリ / ハママツリ、早馬神社例大祭（平成 23 年 9 月 11 日実施）、御崎神社夏期例大祭およびウラバライについて。これらの祭祀を執り行うのが早馬神社（屋号：良護院）であり、川島秀一氏（2003：294）によればもとはウラマツリとは春の漁業（もとはカツオ漁）がはじまる時期の予祝行事として、カツオ船の船主の間から始まったものとされている。

ウラマツリ（年中行事・予祝儀礼）

ウラマツリは、唐桑半島（唐桑町）の 14 の浦々で執り行われている年中行事である。おもに半島内湾側の 4 つの浦（舞根浦、宿浦、北古舘・藤ケ浜浦、鮪立浦、小鯖浦）を早馬神社、外洋側の 10 の浜（マイダ浜、中の浜、笹浜、馬場の浜［前馬場･後馬場］、砂子浜、石浜、稲村浜、金取浜）を御崎神社が管轄している。かつては一浦一村の形態をとっており、ひとつのウラ（浜あるいは港）ごとにウラマツリ会が組織されており、それぞれの神社の宮司とマツリを執り行なった。ウラには各部落の船が繋がれていたが、現在では港湾の近代化や船の大型化によってかならずしも自分の居住している部落のウラ（あるいはハマ）に船をつないでいるとは限らない。自分の居住部落のウラと船を繋いでいるウラとが異なる場合、ウラマツリ会のメンバーシップは自らの居住地のウラ（あるいはハマ）ではなく、自分が船をつないでいる方のウラマツリ会に帰属することになっている。旧暦の 3 月 1 日頃からこの予祝儀礼ははじまっていくが、早馬神社の管轄である内湾川の浦々ではかならずウラマツリは内湾川から奥にむかって執り行なわれなければならない。つまり、もっとも奥にある舞根浦から順に外洋へ向かって執り行なわれる。この儀礼のとき、供物（帆柱、注連縄、その年の月の数の餅、米、酒、塩、賽銭）を載せた小さな木の船が浦から流されるが、この船も当該のウラより外洋側の人しか拾ってはいけないことになっている。これはケガレを内湾にためずに外海である外洋へと流すためであるという。震災後も例年通りこのマツリは執り行なわれる予定であるという。

ウラバライ / ハマバライ（ケガレ祓い）

春の予祝儀礼であるウラマツリに対して、忌みケガレを祓うである儀礼であるウラバライがある。ウラバライは当該のウラを旅立った船が海難事故によって亡くなってしまった場合、あるいは当該のウラに船をつないでいた漁船が遺体を連れ帰った場合、そしてウラに遺体が流れ着いた場合に繰り返し執り行なわれてきた。この儀礼をとりしきるのもウラマツリ会であり、神社の宮司であった。寺（地福寺）の僧侶が御施餓鬼供養を行ない死者に供物や真水を捧げたあと、神社

によってウラでひきつづきウラバライが執り行なわれる。ウラバライでは浜に祭壇がもうけられ、宮司やウラの人びとが祈祷し死者に酒などの供物をささげたあと浜が清められる。この儀礼を終了してはじめて漁師たちは船をだし漁をすることができた。ウラバライを行う前に出漁、出航することは唐桑で禁忌となってきた。通常、このウラバライは死後７日を経過したころに執り行なわれてきたというが、今回の震災では百箇日（平成23年６月19日）を経てようやく執り行なわれた。これはウラバライを執り行なうにも港湾が地盤沈下していて難しかったという理由もあるが、あまりにも死者が多く、なおかつウラバライを行うことで行方不明者を死者と認めることにもなってしまうためにためらわれたからだという。今回の津波犠牲者を悼み、この死を祓うためにウラバライはそれぞれの浦々ではなく小鯖港の一カ所に遺族らが集合して行われた。通常は集合しない漁協の代表らも集った。

写真　被災後一カ所で行われたウラバライ（2011.6.19 小鯖港）

７月には笹浜、高石浜、金取浜で身元のわからないおそらく津波犠牲者のご遺体がたどりついたというが、このときもハママツリ会のメンバーが船をだして遺体を引き上げ、ハマバライを行ったという。ご遺体を引き上げた船も祓われたという。かつてより水死体をひきあげた船は大漁すると伝えられている。

早馬神社例大祭

また、フナマツリとも呼ばれる早馬神社例大祭は被災による参加漁船の減少をまぬがれず、港湾も地盤沈下し瓦礫撤去も未完了の状況ではあったが、ルートや手順を変更して執り行なわれた。通常御神輿を御召船に載せていたのは宿浦であったが、応急的に船がつけられるようになっていた小鯖港よりトラックで運搬されて載せられた。また、通常は寄港し、神輿が巡幸していた浦々（鮪立他）に立ち寄ることができなかったが、海上では例年どおり航海安全と大漁が祈願された。また通常は宿浦から早馬神社、寄港する浦々の各神社までを練り歩いた御神輿は、今年は仮設住宅をトラックでところどころ運搬されながら巡幸した。

流失をまぬがれたエビス石の処遇について（鮪立：Ａ宅［屋号：エビスダナ］付近に所在）

唐桑に限らずエビス石は大漁を祈願する石として（多くの場合里海と外海の境界に）祀られているが、この震災にあたって、流失をまぬがれた鮪立の屋号エビスダナのＡ家前にあったエビス石について興味深いお話を伺った（略）。

文献：川島秀一　『漁労伝承』　2003　法政大学出版局